「社会知性」を体現する校友たち

わ れ ら 専 修 人

File No. 191

J1水戸ホーリーホック監督
樹森大介さん
（平12・商業）
×
J1水戸ホーリーホック選手
山本隼大さん
（令7・国経）



きもり　だいすけ●1977年、埼玉県出身。前橋商業高校から専修大学へ進み、ユニバーシアードで日本代表となり、1999年の天皇杯全日本サッカー選手権大会では専大の出場に貢献。卒業後は2000年に湘南ベルマーレに加入。水戸ホーリーホック、ザスパ草津でもプレーした。2006年から指導者の道に進み、2012年から24年までの12年間、ユース監督やトップチームコーチを経験した後、2025年シーズンのアルビレックス新潟（当時J1）監督となる。そして、2026年シーズンより水戸ホーリーホック（J1）の監督に就任する。

専修大学時代に学生日本代表に選ばれプロを意識。トップチーム監督として初のJ1舞台に挑む

「まったくプロなど意識していなかった」大学生が、専修大学サッカー部時代に転機を迎え、プロサッカー選手に。
引退後は指導者の道へと進んでさまざまなチームで研鑽を積み、
「育成の水戸」の礎を築いたコーチの一人として指導力に磨きをかけ続けてきた。
2026年シーズンから水戸ホーリーホックのトップチーム監督として、チーム初のＪ１挑戦で新たな歴史を刻もうとしている。

「専修大学に入りサッカー部に入部した当初は、プロ選手になろうなどとは全く考えていませんでした」

こう語るのは、今年から日本プロサッカーリーグのＪ１で戦っている水戸ホーリーホック監督・樹森大介さん。

高校サッカーの名門校である前橋商業高等学校を卒業後、専修大学に入学したのが1996年のことでした。その当時は、大学生からＪリーガーになる選手のほとんどは関東一部の中でも上位にいる強豪校で経験を積み、実績を残した選手ばかりという時代です。そのため、関東二部で戦っていた専修大学サッカー部からプロになろうとは考えてもいなかったといいます。

「大学に入学した当時のＪリーグには、まだＪ２もＪ３もなく、チーム数はＪ１の16チームだけ。そこに入れる選手は非常に限られていました。専修大学サッカー部から後にＪクラブになるチームに進む人はいましたが、プロ選手になるために専修大学を選んだという人は少なかったと思います」

しかし、大学４年のときに「プロを意識するようになる」出来事が起こります。「学生のオリンピック」ともいわれるユニバーシアードの日本代表選手に選ばれたのです。

「前年のデンソーカップ（全国の大学サッカーで活躍する選手たちが大学の枠を超えて地域別選抜チームを結成して行う対抗戦）で監督を務めた方が関東二部所属の大学の監督で、二部のいい選手をチームに呼んでくれたんです。それがきっかけとなって、トントン拍子で日本代表までいってしまいました。本当に運がよかったと思っています」

ユニバーシアード日本代表のチームメイトは関東一部で活躍している選手ばかりで、プロを目指している人も少なくありませんでした。そこでプレーできたことが自信となり、具体的な進路として、プロ選手を意識するようになったのだといいます。

しかし、当時の専修大学サッカー部は、学生自身の自主性が重んじられる環境でした。監督はいるものの、OBが仕事をしながらボランティアでやってくれていたため、平日に監督がいることは少なく、指導を受けられるのは日曜日や試合のときくらいだったそうです。

「でも、専修大学だけがそうであったわけではなく、多くの大学が同じような状況でした。自分からサッカーを真剣にやろうと思わない限り、プロを目指すのは難しい環境だったと思います。ただ、グラウンドはよかったですよ。当時、大学としてはとても珍しい人工芝でしたから。アメフト部が強かったので平日はなかなか使えませんでしたが、土日にはそこで練習できました」

プロを目指すようになって、大きく変わったのは内面でした。自分を律する意識が強くなり、スキーやスノーボードが流行っていましたが、ケガする可能性があるためやめるなど、身体のことを気遣うようになったといいます。

「大学のチームメイトにプロを目指している仲間がいなかったのも、自分としてはよかったと感じています。変なプレッシャーや緊張感を強いられることなく、自分のやり方を貫くことができたので。プロを目指す上でのメンタリティなどについては、高校時代の仲間ですでにプロになっている選手が何人もいたので、彼らから話を聞いていました」

本気で選手と向き合い選手と信頼関係を築く

樹森さんは、大学卒業後、2000年に湘南ベルマーレ（当時Ｊ２）に加入。2003年～2004年まで水戸ホーリーホックでプレーした後、ザスパ草津（現、ザスパ群馬）へ移籍。退団後、2006年から母校の前橋商業高校で指導者としてのキャリアをスタートさせました。

「選手のときはやりたいことをやれていたのでストレスはなかったですし、サッカーを楽しんでいた気がします。でも、



クラブハウス、「アツマーレ」（茨城県城里町）での練習風景



練習中もこまめに選手とコミュニケーションをとりながら、チーム戦術の理解や一体感の醸成をはかる



「現在Ｊリーグには、Ｊ２のカターレ富山で指揮を執る安達亮監督（平５・法律）や、ヴァンラーレ八戸の倉石圭二監督（平18・経営）など、専修大学出身の監督もいます。私ども水戸ホーリーホックを含め、温かく応援していただけるとうれしいですね」と樹森監督

指導者となると、そういうわけにはいきません。選手間やスタッフ間、地域のことなど、サッカーに関する指導だけでなく、マネジメントも非常に大事になります。自分のやりたいように、というわけにはいきませんから」

前橋商業高校の後、地元埼玉県のクラブチームでコーチをしていたときに、水戸で共にプレーしていた仲間に誘われ、水戸のユースチームの監督に就任。「育成の水戸」と呼ばれるようになる基礎を築いていきました。

「トップチームは何よりも結果が求められ、人間育成や成長というのは、ある種きれいごとになってしまう部分が少なからずあるものです。しかし、育成年代の場合は結果も大事ですが、やはり一人の人間としての成長に大きく関わっていかなければなりません。思春期の子供たちを預かるので、変な道にそれたりしないように見守る必要もありました」

育成年代の選手たちと向き合うとき、心掛けていたことがあるといいます。それが、「本気で向き合う」ことです。

「本気で叱るし、当事者意識をもって本気で活動していました。彼らにとっては、かけがえのない一瞬の青春時代、そこに一緒に寄り添っているかどうか、その温度感は間違いなく伝わります。子どもたちは、本気で自分の人生に関わってくれるのかどうかというのを感じ取るものです。高校のときの先生がそういう人で、私自身もどんなに怒られても、この人についていきたい、この人と一緒にやれば未来が開けると信じて活動していたので、それを見習って本気で向き合うようにしています」

Ｊクラブ屈指のサポーター、そして地域の思いを胸に

現在、樹森さんが監督を務める水戸ホーリーホックは、2000年のＪリーグ加盟以来初となるＪ２優勝を果たし、2026年シーズンからのＪ１初昇格を決めました。この悲願達成を見届け、森直樹監督（当時）が強化部へと異動。そのバトンを受け継ぎ、Ｊ１という大舞台で指揮を執ることになった樹森監督に、目指すチーム像について語ってもらいました。

「水戸にとって、Ｊ１リーグは歴史的な初の舞台なので、その中で水戸らしさをしっかり表現できるチームをつくっていきたいです。大きな武器である愚直さとハードワークをピッチ上で表現できるチームですね。長いシーズンには、必ず難しい時期も出てきます。どんなときでも、選手とスタッフ全員が同じ方向を向いて戦える、そんな愚直に戦えるイメージです」

水戸ホーリーホックはサポーターとの距離の近さも特徴。廃校を活用した複合施設「アツマーレ」をクラブハウスとして利用していますが、そこには城里町の支所、公民館、バーベキュー施設などの機能もあるため、地域の人たちと自然な交流が生まれます。驚くべきことに、トレーニングルームは地域の方も利用可能な共有の施設で、一緒に汗を流すことも。

「どのクラブよりもサポーターと近いんじゃないでしょうか。声を直接耳にすることなど、いい意味でサポーターや地域の方の思いを背負いながら戦うことができています。そういう期待に応えるためにも、結果をしっかり残して、地域から本当に愛されるチームになり、水戸ホーリーホックに関わってくれるすべての方々と一緒に勝利をつかみとっていきたいと思っています」

（2026年８月取材）

水戸ホーリーホック、各情報

公式サイト

インスタグラム公式

試合日程・結果

負けず嫌いなチームメイトが励みに。J1昇格に大きく貢献

山本隼大選手

やまもと　はやた●2003年生まれ、愛知県出身。社会人サッカー選手だった父と１歳上の兄と一緒に小さい頃からサッカーに親しむ。名古屋高等学校から専修大学へ進学。在学中の４年次に水戸ホーリーホックの特別指定選手になりＪ２の舞台に立つ。卒業後、水戸ホーリーホックに加入し、主力選手の一人としてチームのＪ２優勝、Ｊ１昇格に貢献する。



特別指定選手として水戸ホーリーホックにきたとき、コーチをしていた樹森さんと出会っていた山本選手。「樹森監督は選手のメンタル面を敏感に感じ取って、甘えそうなときに気持ちをピシッと正してくれる人です」

山本隼大選手は、推進力のあるドリブルでサイドを切り裂くアグレッシブさと、戦術的バランスを兼ね備えたウィンガーとして、昨年のＪ２優勝、Ｊ１昇格に主力の一人として貢献しました。

しかし、振り返ってみると、専修大学時代は思うようにいかなかったことが多い時期だったそうです。入学前年まで関東一部だったサッカー部は入学年に二部へ降格し、さらに、翌年には神奈川県リーグへと降格。コンディションが上がらずベンチスタートが続いたことも、ケガで出場できなかったこともありました。

それでも、プロ選手になるという気持ちがブレることはなかったといいます。

「愛知県出身なのですが、プロになるために神奈川県で一人暮らしをする私を快く送り出してくれた両親への恩返しが、プロになることだと思っていたからです。それに、全国の強豪校出身の選手たちに負けたくないという気持ちも強かったですね。プロにならないと、俺死ぬんじゃないかぐらいに思ってました」

サッカー部のチームメイトとプロの話をすることもあるなど、仲良く過ごせたことも気持ちを後押ししてくれたといいます。

「大学時代の練習は走りメインだったんですが、私はゴールまでのペース配分などを全く考えず、いつもひとりで先頭を突っ走っていたんです。気が付いたらチームメイトに２周差、３周差ついていたことも。でも、私同様、負けず嫌いな選手がいて、いつの頃からか４、５人が私について来るようになって、競争するみたいに走るようになっていました。それが嬉しくて、そういう仲間と切磋琢磨できたのがよかったです」

山本選手は大学４年次に特別指定選手として水戸ホーリーホックの一員として2024年のリーグ戦に15試合出場。正式加入した2025年シーズンは38試合に出場し５得点という成績を残しています。

水戸ホーリーホックにとってＪ２優勝もＪ１昇格も2000年にJクラブになって初めてのこと。それを決めた瞬間、その場にいたことは、さぞかし嬉しかったのだろうと思いましたが。

「確かに、嬉しかったです。でも、ここからだなという気持ちの方が強かったです。Ｊ１はずっと求めてきた舞台で、やっとそこに立てるなという気持ちが大きかったです」

ずっと目指してきた舞台で「自分のよさをどんどん出して、目立ちたい」と。

「私はもう24歳で（プロ選手としては）若くはありません。海外でプレーするなどサッカー選手として将来の夢を考えたとき、今年は本当に勝負の年だなと感じています」

Ｊ１という舞台で新たな第一歩を踏み出そうとしている山本選手の活躍を、校友のみなさんもぜひ期待してください。

（2026年８月取材）



©MITO HOLLYHOCK

「私が活躍することで校友の皆さんにも喜んでもらえるだろうし、誇りに感じていただけると思うので、そういう選手になりたいですね。応援よろしくお願いします」（写真提供：水戸ホーリーホック）



真剣な表情で練習に打ち込む姿と、笑顔でチームメイトと談笑するコントラストが印象的